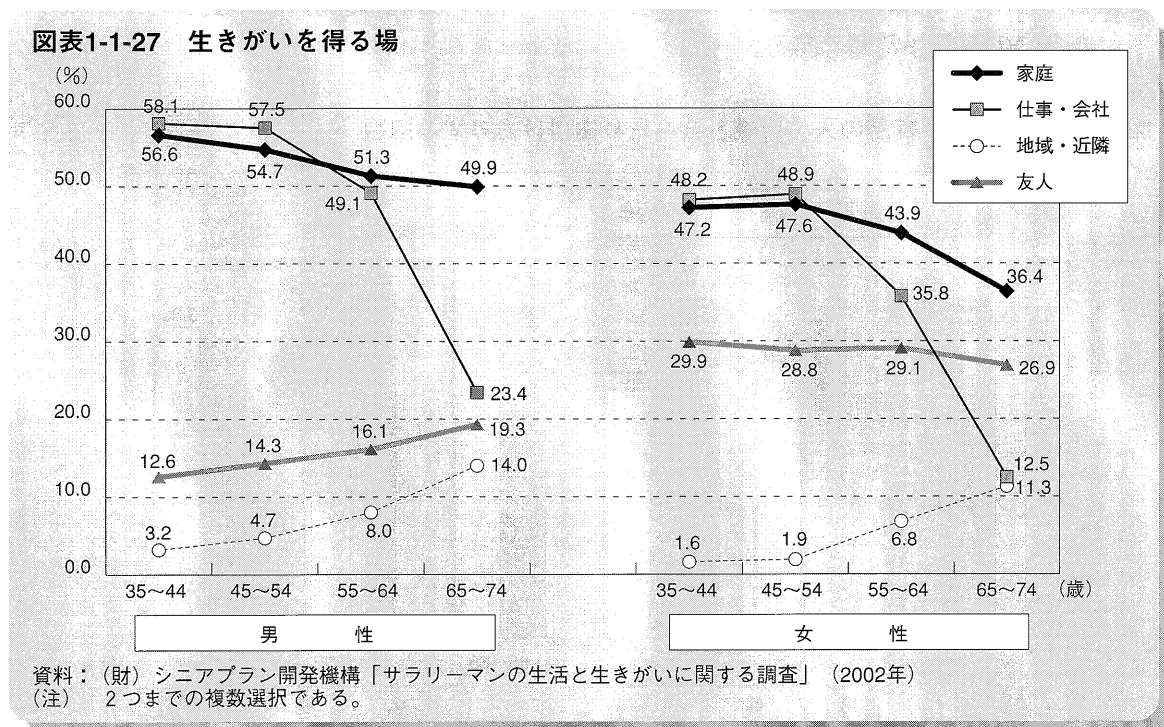


<仕事を引退する前から引退後を考える必要性>

- 上述のように、都市部、被用者、男性で近所付き合いの希薄さが目立つ一方、図表1-1-27のように、高齢期になって仕事を引退するような年齢になると、地域や友人との交流など、仕事ではなくほかの場面で生きがいをより積極的に求めようとしている傾向もみることができる。



<まとめ>

- 現代の高齢者は、経済的にはある程度豊かで、おおむね健康であるが、人とのかかわり（特に家族以外とのかかわり）が少ない等の傾向がある。特にひとり暮らしの高齢者については、日常生活上の問題や健康面の不安を抱えている傾向が大きい。それらの高齢者が地域においていきいきと生活できるような環境を整備するための努力が重要であると考えられる。

第2節 いきいきとした「第2の現役期」のための条件

<高齢者の就労・社会参加が生きがい・健康づくりに関係している状況等>

- 社会的活動に参加している高齢者の6割がその目的の一つを「生きがいを持つため」とし、4割が「心身の健康のため」としているという調査結果もあるなど、高齢者の就業・社会参加が生きがい・健康づくりにつながるとの認識は広く共有されている。
- (財)東京都老人総合研究所の調査によると、男性については就労等の有償労働が生きがいや生活満足度を高めること、男女ともに地域社会への支援提供を行うことによって生きがいを持つことへの効果があるという結果が得られている。
- 高齢男性の就業状況と喫煙、問題飲酒、健康診断未受診等の望ましくない生活習慣の保有率との関係を見ると、非就労者の方が就労者よりもこうした望ましくない生活習慣の保有率が明らかに高くなっている(図表1-2-1)。